

聖書:創世記25章1～11節

説教:自分の民に加えられる

はじめに

きょうは礼拝の後、信徒会を開き、教会墓碑のデザインと予算について皆さんに説明する予定になっています。振り返ると墓地建設委員会（通称「園の会」）を立ち上げたのが2017年でした。翌年に藤野聖山園に墓地を購入し、昨年からは教会墓碑のデザインを考え始めて、こんかい皆様に提案させていただくに至ったわけです。

仏教であればお墓を建てるのは、亡くなった方を供養し成仏するために、また先祖の霊に感謝するためにという目的があるでしょう。聖書では、アブラハムが妻サラを葬るときに洞穴を購入したことが書かれている創世記23章がお墓に関する最初の記事です。2018年の表題聖句とさせていただきます箇所でもあります。きょうはその関連として創世記25章を開いて、アブラハムが地上の生涯を閉じたとき、そのなきながらどう取り扱われたのかを見ながら、改めてお墓について考えていきます。

## 1 アブラハムの生涯

### 1) サラを葬るまで

アブラハムは75歳の時に神から、「あなたは、あなたの父の家を離れて、わたしの示す地へ行きなさい」との召しを受け、それまで住んでいたハランを出発し、今のイスラエルにあたるカナンの地に進みます。そこで主が現れて「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」と言われて、よそ者として住むことになります。順調に見えたアブラハムの歩みでしたが、子どもがいないという、当時の文化ではお家断絶、一家離散を意味するほどの深刻な問題を抱えていました。それでサラは、女奴隷ハガルを側女として連れて来て、アブラハムの間にイシュマエルが産ませ、誰もがイシュマエルが世継ぎになるものだと思った。しかし神のご計画は違うところにあり、アブラハムが百歳のときサラがイサクを産む。そのサラは百二十七歳で亡くなり、アブラハムは、ヒッタイト人からお金を払って買ったマクペラの洞穴にサラを葬りました。

### 2) イサクと側女たちの子

そのことを頭に入れながら今日の箇所を三つに区切って見ていきます。まず一つ目が、1節から3節で、アブラハムがケトラを後妻として迎えたこと

と、そのケトラが産んだ子どもたちの名前が挙げられています。

続いて二つ目の区切りなる5、6節をお読みします。「アブラハムは自分の全財産をイサクに与えた。しかし、側女たちの子には贈り物を与え、自分が生きている間に、彼らを東の方、東方の国に行かせて、自分の子イサクから遠ざけた。」

ときどき聞きますが、親が亡くなった途端に親戚や自分の兄弟から遺産相続の話をして戸惑ったとか、相続のことでめめて親戚同士がギクシャクすることがあります。

アブラハムには前妻のサラとの間に一人息子のイサクがいて、側女であったハガルの間にはイシュマエル、そして後妻のケトラとの間にはここに挙げられている子どもがいましたから、私たちは考えるわけです。「アブラハムは、このまま自分が死んだら遺産相続のことでめめるだろう。そうならないように、全財産をイサクに譲り、側女たちの子どもたちにはそれ相応の財産を分けて、遠いところに住ませ、あとあとトラブルが起きないようにした。」確かにそういう面はあります。しかしそれだけなのか。このことは後でもう一度考えます。

そして三つ目の区切りが7節から11節で、ひとこと言えばアブラハムは幸せな晩年を過ごして亡くなり、妻サラがかつて葬られたマクペラの洞穴の墓に葬られた。跡を継いだイサクは相続問題では悩むことはなかった。「立つ鳥跡を濁さず。」アブラハムは実に見事に地上の生涯を閉じた。そんな話で終わりそうです。

でもよく考えてみてください。なぜイサクだけに全財産を譲ったのでしょうか。今なら、他の子どもたちから文句が出て裁判沙汰になってもおかしくないほど極めて不公平な分け方に見えます。アブラハムはどうしてこのような判断をしたのか。次にそのことを考えていきます。

## 2 神の約束を信じて歩む

### 1) 幸いな人

もしアブラハムが大昔の中東に生きた一人の族長に過ぎなかったというのであれば、イサクを溺愛するあまり不公平な遺産の分け方をした愚かな父親という評価になるかもしれません。しかし彼は、先ほども触れたように、いつも神のみことばに従った人でした。子どもが産まれないことに悩み苦しんでいたときも、「さあ、天を見上げなさい

い。星を数えられるなら数えなさい。あなたの子孫は、このようになる」と神から告げられて信じた人でした。もちろん彼にも弱さがあった、いろいろと揺れ動くことはありました。でも彼はいつも主のみことばに立ち返っていくのです。

そのようなアブラハムの信仰を見るとき、イエスの母となるマリアのことを思い起こさせます。マリアが御使いから自分の身にこれから起きることについて聞かされてから、親戚のエリサベツを訪ねたとき、玄関に迎えに出たエリサベツが聖霊に満たされてこう言うのです。「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

(ルカの福音書1章45節)

アブラハムも、まだ見ていないのに、主が語ったのならば必ず実現すると信じたのですから、彼も「幸いな人」ということになるでしょう。

## 2) 試練

一般に「幸いな人」と聞けば、なんの災いもなく試練もないと思います。そうであれば、私も「幸いな人」と呼ばれたいと思うかもしれません。ところが聖書は違います。「幸いな人」にも試練が来ることがある。それも大きな試練です。マリアは自分が産んだイエスが十字架につけられ、苦しんで死んでいくのを見なければならなかった。母親としてこれほどつらいことはないでしょう。そんな人が「幸いな人」と呼ばれました。

アブラハムもそうでした。苦労の末に子イサクが与えられたのに、あるとき神から「あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行き、彼を全焼のさきげ物として献げなさい」と告げられる。そのあとどうなったのかはご存じでしょう。刃物と手に取ってイサクに振り下ろそうとしたとき、「アブラハム、アブラハム」と呼んで神がアブラハムの手を止めてくれたので、イサクは助かります。神がなぜこのような試練にあわせようとしたのか、聖書には一言も説明がありません。アブラハムがこのとき何を思ったのかも書いていない。ただ神のことばに従ったことだけが書かれているのです。

## 3 アブラハムの信仰

### 1) イサクに与える理由

そんな信仰者であったアブラハムが全財産をイサクに譲るのですから、よほどの理由があったと考えるべきでしょう。それは何か。さかのぼれば、イサクが生まれる一年前のことです。イシュマエルが跡を継ぐとしか思えなかったときに、神は

こう語っていた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼と、わたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」(17章19節)

このみことばを聞いてから一年後にイサクが生まれました。そうしたらアブラハムはどうするか。神はイサクとの間に契約を立てると言われて、イサクを与えてくださったのですから、全財産をイサクに受け継がせるのは当然のこと。アブラハムは、それがきちんと行われるようにと細心の注意を払った結果、あのような財産の分け方になった。

またもう一つ付け加えるなら、アブラハムは、自分が所有する財産はすべて神からの恵みによるものであるとも思っています。であればなおさら、自分の好きなように子どもたちに分けることはできないのです。すべて神のご計画に沿って処理することになる。

### 2) 自分の民に加えられた

こうしてアブラハムは地上の生涯を閉じます。聖書ではそのことを、「そして自分の民に加えられた」と表現しています。いったい「自分の民」とは誰のことか。ヘブル人への手紙11章11節。「こういうわけで、一人の、しかも死んでも同然の人から、天の星のように、また海辺の数えきれない砂のように数多くの子孫が生まれたのです。」

このみことばを読めば、自分の民とは、アブラハムの子孫たちと言うことができるでしょう。天の星のように輝く救われた人たち、それが「自分の民」。アブラハムはその一人として加えられます。

### 3) 墓はカナンの地にあった

最後に考えます。なぜ彼はマクペラの洞穴に葬られたのでしょうか。それは簡単なことで、自分の墓だったから、妻のサラがすでに葬られていたからというかもしれません。しかしもっと根本的な理由があります。あれほど神のみことばを信じていたアブラハムです。墓についても何らかのこだわりがあったのではないか。そもそもマクペラの洞穴はどこにあったのか。23章19節。「その後アブラハムは、マムレに面するマクペラの畑地の洞穴に、妻サラを葬った。マムレはヘブロンにあり、カナンの地にある。」カナンの地は、アブラハムとその子孫に永遠の所有として与えた場所です。「永遠」というからには、からだは死んで墓に葬られても、

よみがえりのいのちがあると考えなければ理屈に合いません。私たちは、聖書は「こうなればいいよね」というような感傷的なことばで使うことは絶対にありません。本当に永遠なのです。

アブラハムはそのことをモリヤの山で知らされました。そこには、イサクをほふろうとする手を止めてくださった神がおられました。あそこには、死んだも同然のイサクをとりもどしてくださった神がいました。その神は、やがてイエス・キリストを遣わします。ご自分の愛するひとり子を十字架においてさばきます。そのなきがらは墓におさめられましたが、三日目に死からよみがえってくださいました。

アブラハムはこれを信じました。もちろん彼はその時主イエスを見ていません。でも必ず主が十字架で罪を贖ってくださり、永遠のいのちをもってよみがえらせてくださることを信じます。そのことを待ち望むからこそ、神が約束の地として与えてくださったカナンにこだわります。マクペラの墓はカナンの地にあった。彼はその墓に葬られ、自分の民に加えられました。私たちもこのアブラハムの信仰に続けたいと願います。